

# 師の操行におよばざれども 慕古を心術とするなり

「正法眼蔵栢樹子」

「叱られた恩を忘れず墓参り」という川柳があります。私達は多くの人々に支えられて生きていますが、とりわけ、叱咤激励をしてくださり、慈愛の念をもって育ててくださった方々の恩は大切にしたいものです。しかし、その恩の重さを思うとき、果たして自分はそれに報いるような功績を残せるだろうか、不安になることもあるでしょう。

先人方の残された道は、高く偉大に見えるものですし、自分はその足元にも及ばないと思うものです。しかし、永い歴史の中で正しい教えが、着実に受け継がれてきているのも事実です。それらは、古人の遺徳を敬慕する後継者の心と行いの中に脈々と受け継がれ、その精神が生きつづけて来たことを忘れてはなりません。

冒頭の句は、道元禪師が、中国の趙州禪師じょうしゅうの故事に想いを馳せて、感想と説法をまとめた『正法眼蔵栢樹子』の文中のことばです。趙州禪師は唐の時代の人で、当時としてはかなりの高齢の六十一才で出家されました。そして、ひたすらに真実の道を求めて旅する中、師匠となる南泉禪師なんせんにめぐり合い、お釈迦様から三十七代目の法を継がれました。その修行生活は、木の実を拾って食べるほど窮乏したそうですが、修行に対しては厳格で、僅かな時間も無駄にしないで坐禅に励まれ、多くの門弟を育てました。道元禪師は、この句で、「趙州禪師のように厳しく徹底した禅の境涯には及ばないけれども、古人の徳行に敬慕すること（慕古ぼこ）を心の糧としていきたい」と説かれています。道元様は、お釈迦様をはじめとする歴代の祖師方の真理を求める厳しい姿勢に感動し、敬慕の念を強くもたれ、日々の修行に励まれました。そのような熱い慕古の精神があったからこそ、今日、祖師方が説かれてきた真髓の教えに出会うことができるのです。

禅の言葉や教えの中には、一般の人々には理解しにくい面もあるかも知れませんが、ここで説かれている「慕古」の精神は分かりやすく、現代の一般社会においても大切なことです。なぜならば、先人への感謝と報恩の敬慕の姿の中に、先人の精神が生きていくことでありますし、さらに私たちの姿が、そのまま後人の鏡となって次の世を形成していくからなのです。

新年を迎え、古の教えに耳を傾け、過去の優れた教えを汲み取ると同時に、新たな気持ちで更なる一步を築き上げて行きたいものです。

表題の句は、道元禅師の書かれた、『正法眼蔵』「栢樹子」の巻の一節であります。この巻は、本文にあります趙州禅師じょうしゅうの問答の一つを取り上げて感想を述べたものです。ある僧が禅師に質問しました。「如何なるか祖師西来意そしせいらいい（なぜ達磨大師は、はるばる西から仏法を伝えに来たのですか？）」と。禅師曰く「庭前の栢樹子ばくじゆし（庭のコノテガシワの木である）」と。これは禅の真髓を説く有名な問答ですが、大切なことは、理屈をはなれて目の前の全体の姿を捉える意であります。道元禅師は、言葉の一句にとらわれるよりは、趙州禅師の日常生活への厳しい姿勢全体から学びとるべきことを教えてくれます。

平成十四年は、道元禅師の七百五十回大遠忌だいおんきの年に当たります。この度の大遠忌にあたり、その御遺徳を偲び、さらに禅師の教えを高揚すべく、テーマを「慕古もこ」と掲げております。「慕古」という言葉は、『正法眼蔵』の他の巻にも延べ七箇所に使われており、道元禅師の精神を伝えるに最も相応しい言葉といえます。

師の操行に

およばざれども

慕古を

心術とするなり

「正法眼蔵栢樹子」

曹 洞 宗

神奈川県 第二宗務所

第五教区 布教部・出版部